

過疎地域（農山漁村）における移住政策の方向性と移住者が求めるものへの一考察

—岡山県西粟倉村における移住と起業の流れから—

一般社団法人 JA共済総合研究所
調査研究部 研究員おおともわかこ
大友和佳子

アブストラクト

本稿は、過疎地域（農山漁村）である岡山県西粟倉村において、都市からの移住を伴う起業の流れが活発に起きていることに注目し、移住政策の方向性について考えたものである。岡山県西粟倉村では地域に仕事を創ることを重視した一定の移住政策が存在してきた。具体的には、こうした村が展開してきた移住政策と移住者が地域に求めるものを双方向から考察した。研究方法は、西粟倉村役場と移住者10名に対し社会的な調査を2023年から2024年にかけて断続的に実施した。結論は、西粟倉村役場が重視している仕事づくり（産業政策）の方向性に対し、移住者は「生活の質」に対しての地域づくりの展開方向をも求めているということである。こうした考察から仮説的に言えることは、過疎地域（農山漁村）における移住政策を考える一つの視点として、仕事を創造するしくみと同様に「生活の質」を高めるような展開も同時並行的に必要とされているということである。

（キーワード） 生活の質 移住政策 移住者の多様な生き方・働き方 仕事づくり

目次

1. はじめに
2. 先行研究
3. 研究目的
4. 岡山県西粟倉村概要
5. 岡山県西粟倉村の政策展開
6. 調査対象とした起業家一覧
7. 調査結果
8. 考察と結論
9. おわりに

1. はじめに

筆者が、「都市部から農山漁村への移住者の増加」に関心を持ちはじめたのは、2016年のことである。きっかけは、東日本大震災後の被災地域の再生プロセスを記録するために宮城県気仙沼市を度々訪れていたことにある¹。津波の傷跡、人々の傷みや苦しみの声に耳を傾ける中で、震災ボランティアをきっかけとして地域に流入した若年移住者に会い、彼ら彼女らの存在に一筋の光を感じた。気仙沼市での研究を進めるに当たり「震災後の変化として最も研究する価値のあることは何か。」という質問を地元の人にしたら「震災ボランティアをきっかけに地域に流入した大学生を始めとする若い子たちがそのまま定住し、地域づくりを盛り上げていることが地域への最も大きいインパクトだ。」と、地元の方々が口々に伝えてくれた¹。これが、私の「農山漁村における移住者」との出会いである。それ以来、特に過疎地域である「農山漁村における移住者」は、現代社会においていかなる意味をもちえるのか、という点が私の強い関心となり研究テーマとなった²。

そして、この出会いをきっかけに全国の過疎と言われる農山漁村で移住者が多く活躍していることを知るようになる³。そこでは、都市の在り方に疑問を抱く特に20代～30代の若者たちが、次世代の暮らしの豊かさや自然資源を活用した持続可能なビジネスを求

め、多様な生き方・働き方を実現しようとする姿があった。

その流れについては、2021年の共済総合研究 Vol. 82で既に述べたところである。拙稿では、移住と起業の先進地域である岡山県西粟倉村と宮崎県日南市を取り上げ、若年移住者が多く集まる地域の要因について考察を加えた。そして、若年移住者が多く集まる地域に共通する要因は、チャレンジを地域ぐるみで応援しあうコミュニティがあることと、起業支援をする中間支援組織があること等を明らかにした³。

本稿は、このシリーズの続編にあたるもので、前回は言及できなかった移住者の具体的な起業状況を明らかにしながら、移住政策の方向性について検討しようとするものである。過疎地域における移住者たちは、何を求め、どのような方法で移住と起業を実現しているのだろうか。そして、政策には何が求められているのだろうか。

2. 先行研究

都市から過疎地域の移住の増加についてはNHKでも度々特集が組まれている。2022年のクローズアップ現代では、「移住新時代 過疎地域にチャンスあり」というタイトルで過疎地域への若年移住を特集している⁵。

また、鈴木他⁶は、東日本大震災後の条件困難地域への定住を選んだ若者たちのライフコースを、定住要因などに焦点をあて検討

1 「東日本大震災後の地域の再生過程」に関する著者の問題意識は、著者自身が東日本大震災を経験したことから生まれている。2011年当時、震災から生き残った者達が、当事者として地域との関わりを深め地域づくりに邁進していく姿を目の当たりにしたことは、災害、そして地域社会の本質を考える上で貴重な経験であった。研究の視点は、大規模災害の後（おそらく、それは今後の日本社会で何度も直面するであろう状況である）、人々を生かすために地域社会において必要なものは何か、という点である。結論としては、地域が外側である地域外とつながることのできる「開かれた自治」の存在が重要なこと等を述べてきた⁴。

している。鈴木他^[6]によれば、若者たちが条件困難地域を選択している理由には、「地域愛着」「人間関係」「働くこと」があり、自己実現と、コミュニティ貢献の両方が価値づけられていることが指摘されている。東日本大震災からの復興という文脈の中で、ソーシャルな課題にコミットしながら自らの役割や居場所を見つけていく若者の姿が描かれている。

また、過疎地域への移住を考える議論には、「人口増だけが地域再生を計る尺度ではない。」といった論も多数存在する。相川・丸山・福島^[7]は、「都市から農山村への移住の促進政策を軽率に人口増加政策として位置付けることは、農山村にとっての本質的な意義を見失う恐れがある。前述の通り、人口は増えていないが新たな人の流入が進んでいる農山村が散見されはじめており、それまで住んでいた住民とは異なる考え方や発想、スキルをもつ新たな人材の増加に結びついている。とりわけ高齢世代が中心の農山村にとって現役世代の移住者の増加は、多世代型コミュニティへの転換という意義も大きい。」と述べている。

また、宮口^[8]は、「過疎地域は人口減少を嘆くのではなく、都市とは異なる価値を持つ豊かな少数社会を目指すべきだ。過疎地域は、より少ない人口で広大な空間を活用する、いわば「先進的な少数社会（多自然型低密度居住地域）」として国土や地域の価値を発展させていく役割を担っている。」と、都市的地域とは異なる価値を実現していく場所として過疎地域を位置づけている。

こうした議論を踏まえると、「過疎地域」（言

い換えれば、それは自然環境の豊かな農山漁村である。）では都市とは異なる独自の価値を実現していく必要があり、その価値を明確に打ち出していくことこそが重要である、ということではないだろうか。

3. 研究目的

本稿では、以上のような問題意識に基づき、①岡山県西粟倉村が政策的に打ち出している移住政策の方向性 ②移住者が地域に求めているものを考察する。そして、過疎地域（農山漁村）だからこそ提案できる地域の価値について考えてみたい。

研究対象地域としては、移住と起業の先進地域として知られる岡山県西粟倉村とした。研究期間は2022年12月から2024年1月にかけてで、社会学的なヒアリング調査を実施した。ヒアリング対象としては、2008年から2023年の間に移住をし起業をした10名の起業家であり、選定については時期・業種・性別等のバランスを考えた上で西粟倉村役場にアドバイスをいただきながら選定した。

ヒアリングの内容は、①移住動機、②地域の支援制度の使用の有無、③移住者が地域に対して感じている魅力、④移住者が地域に対して感じている課題の4点である。

4. 岡山県西粟倉村概要

岡山県西粟倉村は、岡山県の北東端にあり、兵庫県と鳥取県を県境とする村である（図1）。2023年12月現在の村の人口は1,344人で、過疎地域として認定されている²。村の面積

2 西粟倉村役場ホームページ 西粟倉村の統計（2023 / 12 / 1）
vill.nishiawakura.okayama.jp より（2024年1月最終アクセス）

(図1) 岡山県西粟倉村地図

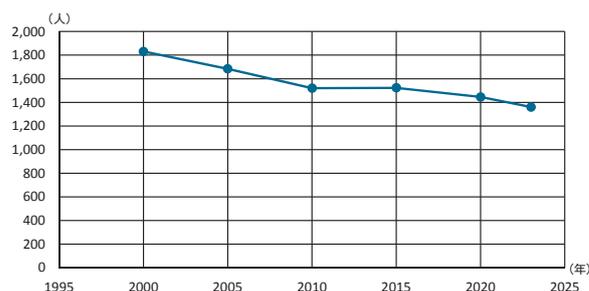


の9割が森林資源であり、高齢化率は37.3%である。

まず、西粟倉村の地域づくりは平成の大合併による合併拒否がスタート地点である。当初は、勝田町、大原町、東粟倉村、美作町、作東町、英田町、西粟倉村の7町村で設置されていた勝英地域合併協議会に加入し、美作市に加わる方向で話が進んでいた。だが、合併直前に住民アンケートによって合併を拒否することになる。合併を拒んだ2004年に、西粟倉村の地域づくりの方向性に大きく影響を与えたのが「アマタホールディングス株式会社」³であり、ここで、村を挙げて「心産業」を創造するという方向性が出された⁴。

その後、村役場は2006年に「雇用対策協議会」を設置し、役場が中心となって地域に仕事を創り出す施策を開始した。具体的には、

(図2) 人口の推移



(出所) 総務省 住民基本台帳を基に筆者作成 [9]

(表1) 西粟倉村への1ターン人数と現在住んでいる人

	1ターンした人	現在、住んでいる人 (子どもの数を含む)
2008	24人	8人
2009	15人	22人
2010	10人	6人
2011	12人	5人
2012	12人	8人
2013	14人	5人
2014	17人	4人
2015	10人	7人
2016	26人	9人
2017	30人	15人
2018	42人	33人
2019	40人	29人
2020	41人	32人
2021	26人	22人
2022	23人	23人
合計	342人	228人

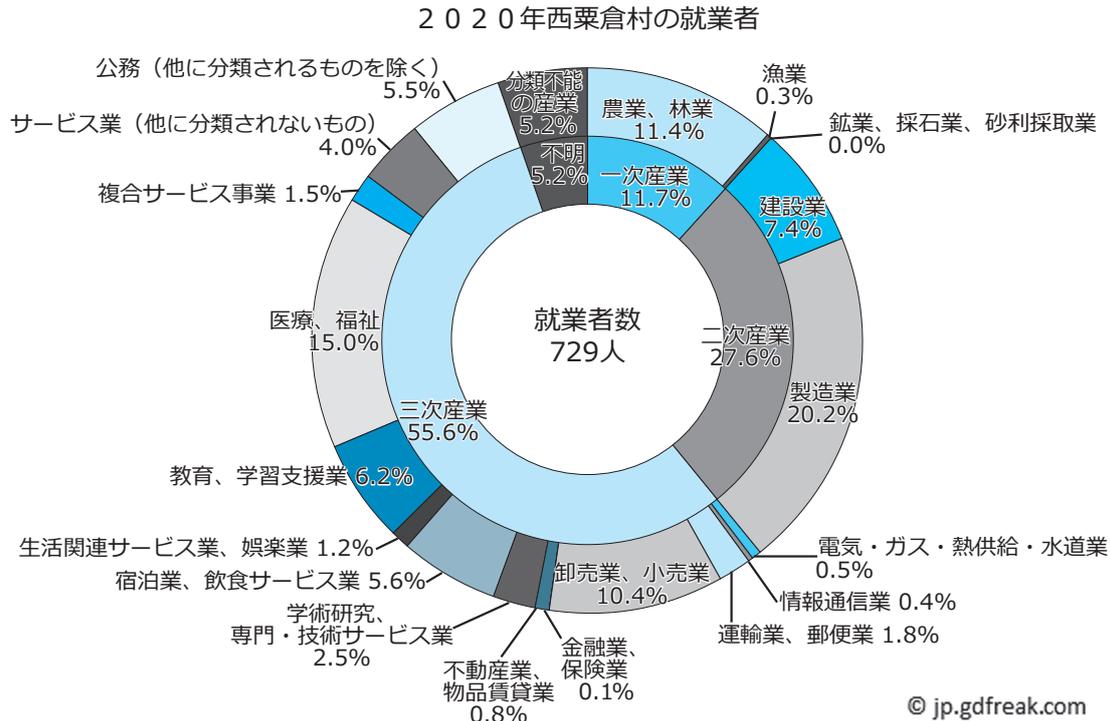
(出所) 西粟倉村役場へのヒアリングにより筆者作成

村で挑戦したい移住者の誘致を開始したのである。2,000人をきる人口規模の小さな村では、村内部の人材だけで新しい事業を創造することはできない。地域外から起業を望む移住者を求めよう、という戦略であった。

西粟倉村の人口の推移は以下の通りである。総務省の住民基本台帳を基に人口の推移を

3 「アマタホールディングス株式会社」は、持続可能な企業経営や地域運営への移行戦略支援などをミッションに掲げている。
 4 「心産業」とは、人と人のつながりを大切にする事で潤う地域経済のことであり、モノと一緒に心も届けようという産業の在り方である。西粟倉村が、消費者にとって得難い価値が体感できる村になれば、村の産業はすべて「心産業」になる、と考えた。だが、当時こうした概念はできたものの、それを具現化する産業を生み出していくことは難しく、その後、試行錯誤が続くことになる。

(図3) 西粟倉村の産業別就業比率



(出所) 総務省 国勢調査及び国立社会保障・人口問題研究所 将来推計人口、総務省 住民基本台帳に基づく人口、人口動態及び世帯数を基にGD Freak! が作成 [11]

(表2) ローカルベンチャーの事業分野

(図2) に示した。2000年には1,800人だった人口は、2023年現在1,344人である²。現在、1,344人の人口の内約17%が移住者であり、2023年現在50事業を超えるローカルベンチャーが立ち上がっている⁵。西粟倉村役場が2008年から2023年にかけてカウントしたIターン者数は342人で(表1)、うち現在も住んでいる人数は228人。定着率は66.7%である。

	事業数	構成比
サービス業	10	18%
製造業	7	12%
(学術) コンサル	6	11%
製造業 (木材関連)	5	9%
林業	5	9%
小売業	4	7%
飲食業	3	5%
宿泊業	3	5%
不動産業	3	5%
医療・福祉	3	5%
漁業	2	4%
教育	2	4%
農業	2	4%
建設業	1	2%
運送業	1	2%
合計	57	100%

次に西粟倉村の産業別就業比率である。
西粟倉村の産業構成は、一次産業が11.7% (全国平均3.5%)、二次産業が27.6% (全国平均23.7%)、三次産業が55.6% (全国平均72.8%) (図3) であり、全国と比較すると1次産業の比率が

(出所) 中村 [12] 「地域経済の現場からー岡山県西粟倉村における「ローカルベンチャー」の叢生 (2019年)

5 ローカルベンチャーの数について正確な数は役場では把握されておらず、「50事業」という数は、2021年度に役場が発行した「ローカルベンチャー図鑑」などを参考にした役場へのヒアリングによる。ここでいう「ローカルベンチャー」の定義は「地方における起業」である [10]。

年先まであきらめない」と改めて宣言したことである、と述べている。

この構想は、管理者がいなくなり放置された森林の管理を村が請け負い、長期的な森林整備を行う。そしてその森林が、地域経済の要となるよう、木材の加工・流通を担う株式会社を誕生させ、川上から川下までカバーしていく、といった内容である。

2023年には約1,000人の森林所有者と契約をし村の私有林の内、約1,600ヘクタールを管理している。こうした地域の自然資源である森林を、村の発展の要として掲げたことが西粟倉村が移住者を呼び込む土台となっている。

(2) 『地域おこし協力隊』の受け入れ開始

次に、西粟倉村の仕事創造に影響を与えているのが、『地域おこし協力隊』の活用方法である。西粟倉村の「地域おこし協力隊」は、「起業型」「行政連携型」「企業研修型」と3つの受け入れ体制を持っている。「起業型」は、自らが経営者となり事業を興すもの。「行政連携型」は、行政内の事業活動に携わるものを雇用する形態。「企業研修型」は既に起業している企業に事業者の新規事業立ち上げや商品開発等の右腕人材として入る。

西粟倉村の地域おこし協力隊の他地域と比較した際の特徴は、①人数の多さ ②「行政連携型」については求める役割の明確さ ③「起業型」については、やりたいことのやれる自由さ の4点に集約できる。

① 先ず、「人数の多さ」についてだが、

2020年42名、2021年43名、2022年47名、2023年51名、と他地域と比較して多い傾向にある⁶。

② 「行政連携型」における役割の明確さであるが、西粟倉村役場では募集の段階で、「どういった業務で、どのような人材を求めているのか」という求める人材像を明確に打ち出している。このことは村が求める人材と実際に雇用される人材の間にミスマッチが起きることを防ぐ目的がある⁷。

③ 「起業型」における「やりたいことがやれる自由さ」についてであるが、「起業型」の場合、一般的に契約を結ぶ行政の考え方によって協力隊の仕事の範囲が決まるしくみである。西粟倉村の場合は、協力隊の意志を尊重することを重視しているため、自由な事業構築が可能である。

地域おこし協力隊の制度は、運用する側の自治体の力量が問われ、うまく活用できているところは数少ない現状がある。そうした現状の中、こうした様々な工夫は、優秀な協力隊を得て、新しい事業を創造させるため実施されている。

(3) 『ローカルベンチャースクール』(2015年ー2021年)

次に、西粟倉村での起業数の増加に貢献した支援のシステムに「ローカルベンチャースクール」がある。「ローカルベンチャースクール」がスタートしたのは2015年で、協力隊の任期である3年間で事業を自立させること

6 総務省地域力創造グループ地域自立応援課「令和4年度地域おこし協力隊の隊員数等について」(令和5年4月4日)では、全国2位となっている。

7 西粟倉村役場における人材募集における「人材像の明確さ」については、2023年7月に西粟倉村で「行政連携型」の協力隊を経験した者へのインタビューによる。

を目的としている。そのための実践やネットワーク構築の機会等を提供してきた。

運営主体は、(株)エーゼロで、ローカルベンチャースクールに合格したものは、協力隊の制度を活用しながら、起業の実践、ローカルベンチャースクールによるコンサル等を受けながら、自らの事業を修正していく機会を得る。ローカルベンチャースクールは、実質的には2泊3日の合宿形式で、初日に自身のプランをプレゼンする。その後、ワークショップ等を踏まえながら自身のプランをブラッシュアップする。最終日にブラッシュアップしたプランを審査会でプレゼンをする。審査会で合格をすると、原則翌年度から協力隊員として西粟倉村に着任し、自身のプランを事業化する。このしくみは、村に多様な事業が誕生することに貢献した。

しかし、こうした事業は、売上規模が比較的小さい個人事業主ベースの起業が主という結果になった。村としては、村民が就職できるような雇用を生み出す規模の企業が生まれることも期待していたが、そうはならなかった。そこで、支援の方向性の転換を図ることとなった。ローカルベンチャースクールは2021年で一旦終了し、次に説明をする「TAKIBIプログラム」が誕生した。

(4) 『TAKIBIプログラム』(2021年)

「TAKIBIプログラム」(図5)とは、地域である程度見込みのありそうな事業テーマを準備し、その経営者を地域外から募集するという方法である。事業構築には地域外からの大企業や地域住民のアイデアなど様々な主体が関係している。

具体的には、地域の願いに基づいた事業テーマ(例えば、観光、子育て、教育など)を予め用意し、そのテーマの専門家やインターン、プロボノ(知識やスキルを活かして貢献するボランティア活動やその人のこと)の方々とブラッシュアップして、プランニングした後に、本格的に実行するプレイヤーとして地域おこし協力隊を用意してスタートするやり方である。

従来の「地域おこし協力隊」と「ローカルベンチャースクール」のやり方は、ビジネスの起点であるアイデアについては、個人の力量にゆだねており、その事業がスケール化していくのか、また本人がスケール化を望んでいるのか、といった点については問われていなかった。

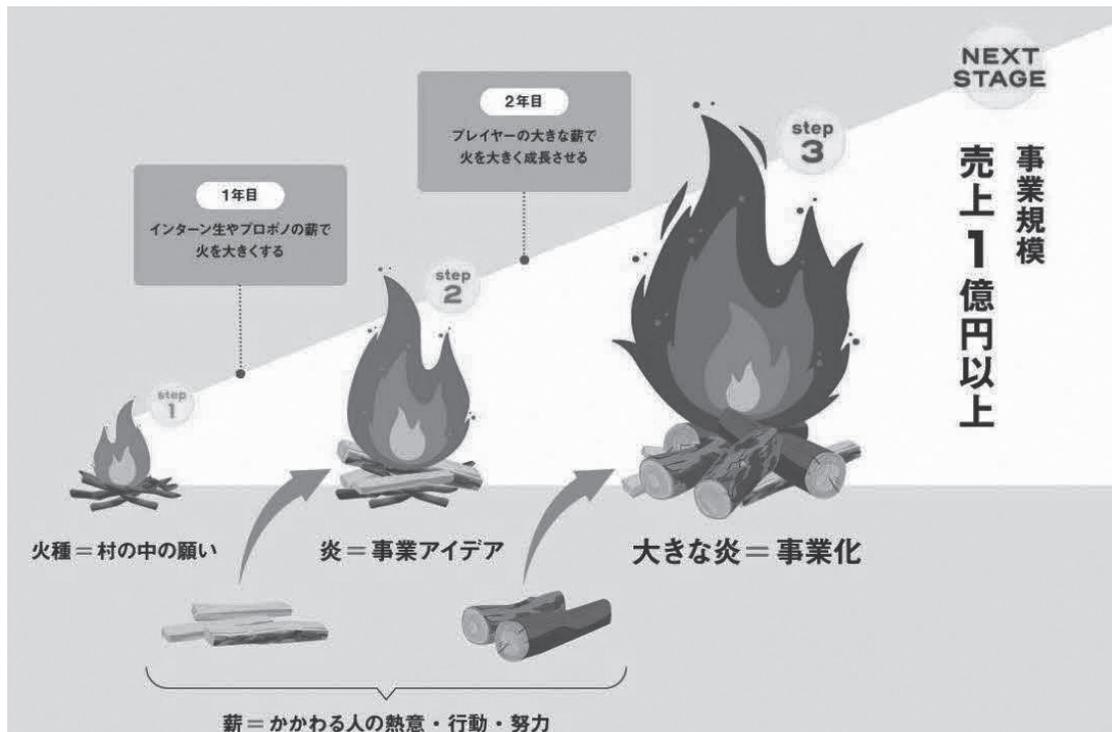
その結果、経営規模としては小さなビジネスが多く誕生したという結果になった。それゆえに、『TAKIBIプログラム』では、あらかじめスケール化しそうなビジネスプランを作り、それを実行したいと望む主体を募集するというやり方に変更したのである。

以上述べたように、西粟倉村の仕事創造の流れには歴史的な展開がある。

ここで強調したいのは、西粟倉村の地域づくりの方向性は、地域経済の強化にあることである。「ローカルベンチャースクール」の企画運営を担当していた(株)エーゼロの代表取締役である牧氏は、自身のスタンスについて、「地域全体の売上を伸ばすというとても資本主義的な営みに注力をしている」と述べている^[13]。

移住を伴う地域づくりの目指す方向性には、コミュニティ活動や共助のしくみを重視

(図5) 『TAKIBIプログラム』概要図



(出所) 西粟倉村役場から資料の提供

していく方向性、個人の生き方の確立を目指す方向性、地域経済の活性化を目指す方向性など様々なものがある^[3]。

本研究で対象としている西粟倉村の事例では、地域経済の活性化を主眼とした産業政策の流れが存在している点が一つの特徴であると言える。

6. 調査対象とした起業家一覧

次に調査対象とした起業家の事業10件を、(表3) に示す。

(表3) 調査対象とした起業家一覧

	会社名	性別	現在の年齢	起業年	事業内容	従業員数
1	株式会社 ようび	男性	44歳	2009年	家具製造販売・企画	15名
2	軒下図書館	女性	51歳	2010年	語学教室／パン屋／ 宿泊／ヨガ教室／ ツアー（ガイド業）	1名
3	mori no oto	男性	70歳	2014年	木製楽器・ おもちゃの製造・販売	1名
4	株式会社 百森	男性	36歳	2017年	西栗倉村における山林の 管理	5名
5	nottou株式会社	男性	39歳	2015年	デザイン業／ 空間設計業	5名 (内協力隊2名)
6	株式会社 元湯	男性	32歳	2018年	バイオマス事業／ ゲストハウス	10名 (内バイト2名)
7	合同会社 ローカルモビリティーズ	男性	49歳	2019年	福祉	1名
8	シブヤカバン	男性	39歳	2018年	かばんの製造・販売	1名
9	こじか助産所	女性	53歳	2018年	助産師	1名
10	西栗倉村100年の森林協同組合	男性	33歳	2021年	森林協同組合	1名

(出所) ヒアリングにより筆者作成

調査対象者は10名で、移住時期は、2009年から2021年までである。調査対象者の選定は、西栗倉村役場にアドバイス等を伺いながら、時期、業種、性別などが多様になることを工夫して選定した。

7. 調査結果

それでは、調査結果について

- (1) 移住の動機と他地域との検討の有無
 - (2) 地域の支援制度の使用の有無
 - (3) 移住者が地域に感じている魅力
 - (4) 移住者が地域に感じている課題
- の4点に分けて記述をする。

(1) 移住の動機と他地域との検討の有無

まず、移住者の移住動機と他地域との検討の有無について次のページの(表4) に示した(個人情報との関係から動機のみを順不同で示した。以下(表5)(表6)(表7)についても同様に回答のみを記載した。)

(表4) から移住の動機について、延べ人数で説明をすると

- (1) 「林業や林業に関わる仕事への問題関心」が4名
- (2) 「地域の問題解決といったソーシャルビジネスへの関心」が7名
- (3) 「暮らしのニーズ」が4名
- (4) 「既に活躍している移住者がおり面白そ

(表4) 移住動機と他地域との検討の有無

	移住の動機	他地域との検討の有無
1	複数の要因が重なっている。もともとは神奈川県で助産師として働いていた。東日本大震災をきっかけに大都市での生活に不安を抱くようになり、安全性の面から顔の見える小さなコミュニティで生活がしたいと考えるようになった。同時に夫も義父のいる大阪に近いところに住みたい、という意向があったり西栗倉村でたまたま助産師の募集がある、など様々な要因が重なり移住を決めた。	情報収集はしている。
2	東京で、行政の仕事に関するコンサル業務に従事する中で、地方の様々な課題、特に交通の問題に対する課題解決を具体的にしたいと考えるようになった。その中で「都市と農村を結ぶ」というコンセプトでの学びの場である「さとのば大学」に出会う。「さとのば大学」のフィールドワークで西栗倉村に出会う。起業支援に公費を投入するローカルベンチャースクールは、当時日本では唯一無二の画期的なもので、興味を持つようになった。その中で、起業をする前に住むことができる「ローカルベンチャーラボ」という制度が、2018年から2022年までの間あった。それを使用しながら協力隊員として移住した。2017年から役場に地域創成推進チームができ、その中に提案されたテーマに妻の職業である助産師というものがあり、そうした経緯もあり移住を決めた。	情報収集はしている。
3	職場に早期退職のような機会があった。京都で木で楽器を作る人に修行に行き、木のことで新しい仕事を創ろうと考えた。その際、西栗倉村の「森の学校」を見学する機会があり、初めて地域おこし協力隊の制度のことや地域活性化に国の税金がどのように使われているのかなどを知った。今までサラリーマンをしていた時は、プラスチックを使う仕事をしていて、日本の林業などには無関心で衰退していることが様々な問題を抱えていることを知らなかった。「森の学校」がとてもスマートで洗練されていることに魅力を感じ、木のことについてもっと知りたいと思う気持ちが高まり移住を決めた。	なし
4	前職は東京でITベンチャーで働いていた。ITの世界は変化が早く、去年までしていた仕事が一年でがらりと変わる。何か新しいことを始めようとするタイミングで、友人が西栗倉村で森林について勉強をするというのでついてきたことで西栗倉村を知った。森ができるまで50年かかることなど時間が必要なスケールの大きい仕事に魅力を感じた。(株百森という役場が提示した仕事内容に魅力を感じ移住を決めた。	情報収集はしている。
5	もともと大学院で林業や環境に関わることを研究していた。山を元気にしたいという想いがあった。山に関わる仕事で探していたところ、西栗倉村の協力隊の制度を知る。「西栗倉村100年の森林協同組合」という森林の六次化を促進するような仕事を募集していたため、やってみたいと思い応募をした。	情報収集はしている。
6	起業をすることを大学時代から決めていた。仕事をするのであれば、現在価値がないと思われるものの価値を高めていくような仕事、社会的意義がある仕事をしたいと思った。そこで、バイオマスを活用した事業を展開している市町村を調べ、その中で西栗倉村で展開しようとしているエネルギー事業に価値を感じた。	情報収集はしている。
7	イギリスで小学校の英語の先生をしていた。日本に帰ることが決まった時に、田舎に住みたいということになった。どうせ住むのであれば中途半端な田舎ではなく、自然が豊かな過疎地域に住みたいと考え、祖母の家(当時は空き家)がある西栗倉村へ決めた。	なし
8	最初は千葉県でサラリーマンとして働いていた。20代の終わりにカバン職人になろうと決めて倉敷で技術を学んでいた頃に、スタートアップウィークエンドという週末に小さなお店を開くチャレンジをした。その際に西栗倉村の(株)エーゼロの方に会い、西栗倉村へ来ないかと誘われた。小さな作家さんが多かったこともあり、移住と起業を決めた。	なし
9	岐阜高山で働いていた時に、西栗倉村の森を視察する機会があった。その時に、一般的に家具に用いられる紅葉樹は山にはほとんど残されておらず、代わりに先人たちが守ってきた針葉樹の森さえも、木材の需要が減り、それが原因で林業が衰退し、森を大切に思う人が減ったことで荒れた森が増えてしまっているということ、真に理解した。日本の林業と里山に関わる深刻な課題を目の当たりにし、デザイナーで当時は職人でもあった私は、この状況は自分自身の責任であると思うほどの使命感を覚え、移住。「やがて風景になるものづくり」を理念に会社を立ち上げた。過去から未来、森から都市、作り手から使い手、その間にある存在。日々のものづくりと縁を通じて、風景そのものとして生きる、という考えである。	なし
10	東京で、デザインの仕事に従事していた。子育てをしていた時に、「子供の泣き声がうるさい」という張り紙を匿名ではられた。都会で子育てをする大変さを感じ、田舎に住もうと思った。移住者が多いところの方がいいと思いインターネットでいくつかの場所を調べたが、結局ネットで見ていただけではどこがいいかがわからなかった。その中でよさそうだった西栗倉村へとりあえず行ってみようという気持ちで行った。	情報収集はしている。

(出所) ヒアリングにより筆者作成

うである、村に様々な動きがある」等が4名という結果である。

(1) 「林業や林業に関わる仕事への問題関心」が4名

という点については、西粟倉村が掲げる100年の森林構想というビジョンへの共感や関心があると考えられる。

注目したいのは(2)であり、「地域の問題解決といったソーシャルビジネスへの関心」が7名、という結果が出ている。過疎地域への移住を志すものの属性として、「ソーシャルビジネスへの関心」があることについては、前項で提示した先行研究の東日本大震災後の条件不利地域における研究でも指摘されている^[6]。

また、(3)「自然環境や子育て環境などの暮らしのニーズ」が4名、という点については、農山漁村特有の自然環境やコミュニティの在り方が関係している。

そして、(4)「既に活躍している移住者がおり面白そうである、村に様々な動きがある」が4名である。この4名は、既に移住者が集まり活躍した後の移住者のニーズであり、だいたい2014年以降となっている。

(2) 地域の支援制度の使用の有無

次に(表5)の説明に移りたい。

(表5) 『地域おこし協力隊員』や『ローカルベンチャースクール』の制度の利用の有無

	地域おこし協力隊員の制度の利用	ローカルベンチャースクールの参加の有無
1	なし	なし
2	なし	なし
3	あり	なし
4	あり	参加
5	なし	なし
6	あり	参加
7	あり	参加
8	あり	参加
9	あり	参加
10	あり	なし

(出所) ヒアリングにより筆者作成

(表5)は「地域おこし協力隊」や「ローカルベンチャースクール」の制度の利用の有無について説明したものである。地域おこし協力隊の制度はほとんどの方が活用している。また、ローカルベンチャースクールについても参加の割合は高く、村の制度を利用しながら村への理解を深め関係を作っている様子が伺える。

「地域おこし協力隊」と「ローカルベンチャー」の制度を利用していない3名の内、2名は2つの制度が村内にできる前に移住しているため利用していないという回答である。

(3) 移住者が「地域に感じている魅力」

次に、移住者が「地域に感じている魅力」について（表6）にまとめた。

(表6) 移住者が「地域に感じている魅力」

	魅力と感じていること	まとめ
1	地元の人がわりとウェルカムでたくさん話しかけてくれる。面白い人が多い。	人
2	人口が少ないので、誰が何をやっているのかわかりやすい。自分が活動をしようとする時も誰と何をすればどうなるのか戦略が考えやすい。	コミュニティの規模がビジネスに好影響
3	地域で自然に根付いた落ち着いた暮らしができています。集落にも溶け込んできた。	自然の中の暮らし
4	地域には何か活動をしたいと主体的に生きる面白い人が多い。	人
5	村に知名度があるので、何か企画を立てたりした時に、全国に対してアピールがしやすい。そのため、田舎であるにも関わらずスケールの大きい仕事にチャレンジすることができる。	知名度（スケールの大きいビジネスができる）
6	役場にベンチャーマインドがあり、村がどんどん変化していくことが面白い。どんどん変わっていくという面白い人が多い。	人・地域の変化・知名度（交流人口の多さがビジネスへ好影響）
7	高校生の息子が社会の貧困問題にアプローチする自由研究をしようとした時に、地域の志の高い活動をしている大人たちが惜しみなく手を差し伸べてくれた。これは地域に志のある人が多く集まっているからだと思う。また、西粟倉村は知名度が高く視察が多い。宿泊業をしている身からすればとても助かる。同じ田舎に住むにしても西粟倉村でよかったと感じている。あとは自然の中で暮らせることが一番嬉しい。	人・知名度（交流人口の多さがビジネスへ好影響）・自然の中の暮らし
8	明日（未来）をよくしようと、毎日何かしらの活動をしようとしている人が多いこと。チャレンジしている人が多いこと。	人・ビジネス環境として
9	自然の中で暮らすことができることに魅力を感じている。また、人口の少なさ、コミュニティの規模感も都会よりはいいと感じている。	自然の中の暮らし・コミュニティの規模感
10	住んでいるところは限界集落で子供がいなかった。引っ越した時に、集落の人がみんな子供がいることを歓迎してくれた。田舎を売りにしたビジネスを展開できる。	子育てのしやすさ・ビジネスへのメリット

(出所) ヒアリングにより筆者作成

(表6)によると、移住者が地域に対し魅力を感じている点は、

- (1) 「人（チャレンジしようとする人が多い、志の高い人が多い、面白い人が多い、等）」が5名
- (2) 「知名度やコミュニティの規模感等のビジネス環境（知名度が高いのでスケールの大きい仕事ができる、人と人との関係が近いので何かをするときに協力しやすい、等）」が6名
- (3) 「自然の中での暮らしや、子育て環境など暮らしのニーズ」が4名

となっている。

また移住者が「地域に感じている課題」について（表7）にまとめた。

（表7）移住者が「地域に感じている課題」

	感じている課題	まとめ
1	森林に関わる事業者がつながることの難しさ。家が圧倒的に足りていない。産業重視で暮らしやすさへのサポートが足りていない。	住環境・暮らしのサポートの少な さ・産業重視の村の方向性
2	村長選などで村が対立していることを知り、今後の村政の方向性について は少し不安に思うこともある。	村の方向性や対立構造
3	村が目指している方向性が、売上規模の大きい起業家の支援になっ ているが、売上規模関係なく支援してもいいのではないか。	売上額重視の村の方向性
4	村が目指している方向性が、売上規模の大きい起業家の支援になっ ているが、売上規模関係なく支援してもいいのではないか。	売上額重視の村の方向性
5	自分は大きく不便を感じてはいないが、教育の選択肢のなさという課題は あると思う。	教育の選択肢のなさなど
6	チャレンジャーが多く流入してくるが、それぞれのライフステージに合わ せた多様な家の選択肢がないことは課題であると感じている。	多様な住環境の選択肢がないこと
7	医療状況。赤ちゃんを安心して産める環境が整っていない。住居が足りてい ない。	医療・住環境
8	地域の成熟度を考える上ではいくつかの視点があると考えている。例えば、 良い働き先や心地のいいカフェ、パブリックスペース、地域の楽しみ、多 様な居場所などです。こうした総合的な点から見れば、西粟倉村はまだま だ地域づくりの歴史が浅いため醸成中であると考えている。地域がまだ若 いので余裕や余白が少なく、「ゆっくり」や「漠然と」のような活動の人が 居づらい雰囲気もあると思う。また、地域はチャレンジをしたい若い人が 多く集まり資本力のない人も多。それにしても家の家賃は高いので、住 環境の整備は必要ではないか。	多様な遊び場や居場所、パブリッ クスペースなどが少ないこと、住 環境、
9	村が目指している方向性が売上規模の大きい起業家の支援になっ ていることが関係してか、商売になりづらい小さな作家さんたちが村からい なくなっていること。いろんな人がいるからこそ地域の豊かさなのではないか。 住居が足りていないこと。	住環境・売上額重視の村の方向性
10	自分で選んだ地域なので不満という形ではないが、買い物の不便さや医療・ 教育の選択肢のなさ、等の課題はあると思う。	買い物、医療、教育の選択肢のな さなど

（出所）ヒアリングにより筆者作成

（表7）をまとめると、

- (1) 「住環境」についてが5名
- (2) 「医療・買い物・教育」などの公的インフラについてが3名
- (3) 「売上重視の村の方向性」についてが4名
- (4) 「村の対立構造」についてが1名
- (5) 「居場所や遊び場・パブリックスペースの少なさ」についてが1名である。

(1)「住環境」については、ライフステージに合わせた住環境の不足が指摘されている。

(2)「医療・買い物・教育」などの公的インフラについては、西粟倉村だけに見られることではなく多くの過疎的自治体に見られることである。回答者もそれを前提で移住しているので不満というわけではないが、もっと充実したら村はよくなるのではないかというニュアンスでの回答である。

(3)「売上重視の村の方向性」についての課題意識は、2021年に開始された「TAKIBIプログラム」への方向転換への問題意識とみられる。「TAKIBIプログラム」では、雇用を生み出せるレベルの企業を作るという目標を明確に掲げている。この点について、規模感関係なく様々な事業者への支援があった方が豊かで多様な地域になるのではないか、という意見である。

(4)「村の対立構造」については、村長選における対立などを指している。

(5)「居場所や遊び場・パブリックスペースの少なさ」については、地域全体の成熟度を総合的に考えると、そうした多様な居場所が充実していることが重要なのではないか、という総合的なまちづくりの観点からの指摘である。

このように移住者は、地域に魅力を感じ新しいチャレンジにとりくみながらも様々な課題意識を持っていると言える。

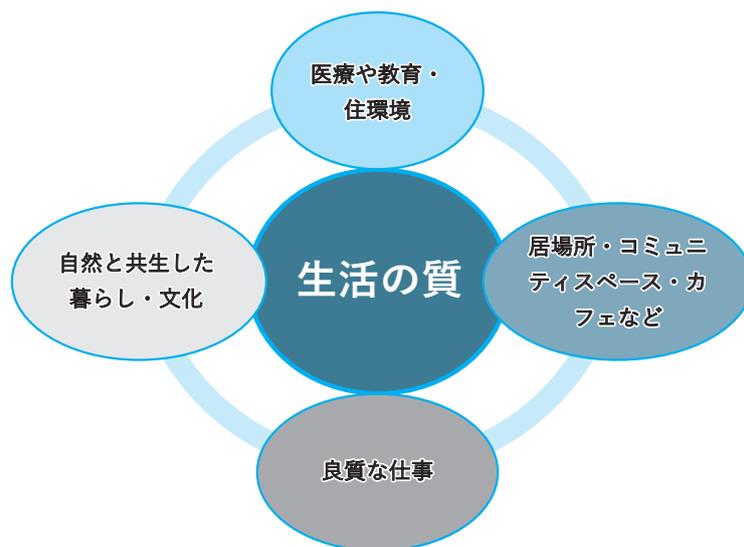
こうした移住者が地域に求めるものについて(図6)に示した。

(図6)を用いて説明すると移住者が求めているものには、①自然と共生した暮らし・文化 ②医療や教育・住環境 ③居場所・コミュニティスペース・カフェなど ④良質な仕事等の多面的な「生活の質」と言える。

こうした「生活の質」についての議論について木下^[14]の文章を引用しながら説明をしたい。

木下^[14]は、「農山漁村、過疎地域の振興にとって重要な基礎となるものは、生活の質なのではないか。」という問題意識を提起している。さらに、「過疎地域を含めて、農山漁村の振興に当たっては、まず、そこには、都市的な生活の場とは異なる「質」をもった生活がある、ないしはありえるという認識をすることが大切なのではないだろうか。」と述べている。続けて、「この「質」の認識は、農山漁村と都市という相違だけではなく、

(図6) 移住者が求める多面的な「生活の質」



(出所) ヒアリングにより筆者作成

「自分の村や町」「他の村や町」との「質」の相違の自覚まで進んでいく必要がある。」と述べている。そして、「地域の中で「生活の質」を回復したり、創造しようとする運動こそが「村づくり」なのではないか。」という見解を述べている。

このように、地域には、その地域特有の「生活の質」が存在しており、それが移住者を惹きつける一つの要素となっている。このような議論を踏まえると、西粟倉村の移住政策において「仕事を創造すること」が重要視されていることは重要な点であり、その方法論から学ぶものは多い。だが、それと並行して「生活の質」をいかに高めていくのかという展開も、同様に必要とされているのではないか、という仮説を提案したい。

8. 考察と結論

以上のような調査結果から、次の2点について言及しながら、結論を示したい。

- ① 岡山県西粟倉村が政策的に推進している移住政策の方向性
- ② 移住者が西粟倉村に求めているもの

まず、①についてである。岡山県西粟倉村の移住政策は、2023年現在変化の途上であると言える。2015年から開始した「ローカルベンチャースクール」が2021年で一旦終了し、新たに「TAKIBIプログラム」が始まっている。

2021年の「TAKIBIプログラム」開始以降、西粟倉村としては、「雇用を生み出す規模感の産業を誕生させる」ことを目標としており、それは従来の起業家養成の路線の延長線上にあるとは言え、より事業のスケール化を重視

させる方向に舵をきっている。これは、規模の大きい企業を誕生させることで、地元住民の雇用の場を創出するという目的がある。これらの支援方法の転換によって今後どのような産業が生まれえるのか、非常に興味深い時期である。

② (1) 一方、移住者側の移住動機（実現したいと思っているもの）については、2009年から2021年までの移住者についての今回の調査上では、「生活の質」…5名、「(森林に関する)事業構築のため」…5名、とスケール化したビジネスの実現が移住の大きな要因とはなっていない。

(2) また、移住者が魅力を感じている点については、「自然と共生した暮らし」が…4名、「人」…が5名、「知名度」が…2名となっており、自然と共生した暮らしや人に魅力を感じているものが多い。

(3) 移住者が課題と感じている点については、「経済優先の政策の在り方」が…3名、「住居が足りないこと」が…4名、「医療・買い物・教育の選択肢のなさ・質のいい仕事・居心地のいい居場所など地域の公共的なインフラへ」が…4名、「村の対立」が…1名となっており、特に「総合的な生活の質」への課題が大きいという結果が出ている。

前項の(図6)に述べたように、移住者が地域に求めるものは、一つではなく複数にまたがっている。仕事・子育て環境・自然と共生した暮らし、人との関係・住環境などである。こうした点を総合的に考察すると、過疎

地域（農山漁村）が、都市からの移住者を獲得しつつ魅力的な地域として持続可能に展開していくためには、「生活の質」に関する多様な環境整備も重要と考えられる。

9. おわりに

本研究では、過疎地域（農山漁村）における移住政策の方向性について、岡山県西粟倉村における「移住と起業」の流れに焦点をあてて検討した。

過疎地域（農山漁村）への移住の増加の根底には、都市的な社会の在り方における総合的な持続性（働き方・暮らし方）への疑問や生きづらさが存在している。

岡山県西粟倉村が目指しているものは村の存続であり、そのためには雇用を生み出す経営規模の大きい産業が必要だという政策的な展開がある。一方、移住者側が求めるものは、経済的な価値だけではなく、子育てや自然との共生した暮らし、医療、教育、住居、居心地のいい居場所、などを含む「総合的な生活の質」がある。

こうしたことを踏まえると、今後の過疎地域（農山漁村）の発展のために重要な点は、様々な角度からの村全体の成熟と考えられる。具体的には、経済的な価値を生み出すことのできる雇用の場と同様に、子育て・教育・医療・居心地のいい居場所、自然と共生した暮らし等多様な「生活の質」が求められている。そして、こうした「生活の質」の創造には、地域資源に基づいた独自の生活文化や地域の歴史的背景について人々が十分に理解をし議論を展開していくことが必要なのではないだろうか。

移住者、そして地域の人々に見られる多様なニーズと政策が、今後どのような合意形成を経て展開されるのか、また、変化を担う主体は誰なのか、という点を今後の動向として注視していきたい。

謝辞

原稿の執筆にあたり、西粟倉村役場、起業家である移住者の方々には、インタビューにご協力頂き深く感謝申し上げます。

参考文献

- [1] 大友和佳子 (2019)「東日本大震災後の移住者活躍の要因と効果に関する一考察：宮城県気仙沼市唐桑町の事例から」, 地域活性学会研究大会論文集 11 57-60
- [2] 大友和佳子 (2019)「若年層の「移住者」の活躍から見える「次世代の豊かさ」：宮城県気仙沼市唐桑町からのレポート」, 共済総研レポート 163号, 56-63
- [3] 大友和佳子 (2021)「地域における「若年移住者」の新しい取組みと支援に関する研究：地域起業（ローカルベンチャー）と中間支援組織の視点から」, 共済総合研究 82号, 20-31
- [4] 大友和佳子 (2017)「震災後の地域再生における「コミュニティカフェ」の役割：東日本大震災後の宮城県の事例より」, 共生社会システム研究／共生社会システム学会 編 11 (1), 239-260
- [5] NHK, 「移住新時代 過疎地域にチャンスあり」, 2022年8月3日放映 (<https://www.nhk.or.jp/gendai/articles/4694/>)
- [6] 鈴木勇、山本晃輔、岡邑衛、榎井縁、志水宏吉、高原耕平、宮前良平 (2023)「東日本大震災被災地における若者のライフコース 条件困難地域で生活する理由とコミュニティの復興」, 未来共創第10号
- [7] 相川陽一・丸山真央・福島万紀 (2021)「過疎山村自治体における「脱成長」型の移住・定住促進施策の展開－長野県天龍村の事例」, 長野大学紀要 第43巻第2号, p.2
- [8] 宮口侗旭 (2020)『過疎に打ち克つ』, 原書房
- [9] 総務省 住民基本台帳 (http://www.soumu.go.jp/main_sosiki/jichigyousei/daityo/jinkou_jinkoudoutai-setaisuu.html), (最終アクセス 2023年12月26日)
- [10] 「ローカルベンチャー図鑑2021」西粟倉村役場
- [11] グラフで見る！西粟倉村（岡山県）の就業者数とその産業構成 (<https://jp.gdfreak.com/public/detail/jp01005000000/033643/14>) (最終アクセス 2023年12月26日)

-
- [12] 中村聡志 (2019) 「<地域経済の現場から>岡山県西粟倉村における「ローカルベンチャー」の叢生」, 資本と地域, 14巻, 54-57
- [13] 牧大介 (2016) 「真に必要な地方創成支援とは何かー西粟倉村での仕事づくりの経験からー」, 農林業問題研究, 52巻1号, p.10-16
- [14] 木下謙治 (1978) 「生活の質を問うー過疎地域問題調査報告の概要(その3)」, 「過疎情報」, p.16, 全国過疎地域対策促進連盟発行